家族奪還ゲーム

ハレル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
家族奪還ゲーム

【Ｎコード】
Ｎ６７１９Ｗ

【作者名】
ハレル

【あらすじ】
そう遠くない未来。妻子持ちのいたって普通のサラリーマン、滝本誠司は、ある日息子の歩が何者かに誘拐されたことを知る。歩を返して欲しければ、我々とゲームをしろ、という指示に従い、誠司は非日常の世界に引きずり込まれていく・・・

プロローグ（前書き）

初めて投稿する小説です。読みにくいかもしれませんが、生暖かい目で見てやってください。なお、遊戯王ＯＣＧメインです。

プロローグ

そこそこ遠い未来。ある日の朝。
どこにでもいるような普通のサラリーマン、滝本誠司は、郵便受けに入っている奇妙なものに気づいた。
差出人不明の、真っ白な封筒。
何だコレは？といぶかしみながらも、他の郵便物とともに家に持って上がった。居間に入り、妻の美咲（みさき）に例の手紙以外の郵便物を渡して、ソファーに腰掛ける。
宛名は紛れも無く「ｔｏ滝本誠司」で、手違いではなさそうだ。適当に開封すると、中に入っていたのは手紙と、１枚のトレーディングカードだった。表面にはカードの名前、イラスト、そして小さな文字でテキストが書かれている。
「『スターダスト・ドラゴン』？」
白銀の翼を大きく広げ、両の脚で大地を踏みしめて、咆哮しているようなその龍。誠司はカード自体に見覚えがあった。デュエルモンスターズだ。
確か、中学生までやっていた。
「てかなんだ？『シンクロ』って・・・」
そう呟いて、カードをちゃぶ台に置いた。やめてからもう１０年近く経つ。ルールが変わったのかもしれないし、似てるだけで全くの別物なのかもしれない。
そして、肝心の手紙を見ようとした、と
「あ、とーさん」
起き掛けです、という感じで息子の歩（あゆむ）が二階から降りてきた。
「きょうはおしごとないの？」
「ああ、ないよ」
そう答えると、誠司はとても嬉しそうに、
「じゃ、今日は遊べる！？」

と誠司に聞いた。
「仕事が少しだけ残ってるんだ。それが終わったらいいよ」
「え。うん、わかった！」
少し残念そうに、そしてかなり嬉しそうに誠司は返事した。そして、ちゃぶ台に置かれたカードに気づき、てけてけと寄ってきた。
「あ、ゆーぎおーだ」
「え、やっぱりそうなのか」
「みんなやってるよ。タカシくんも、ヒロキくんも、かなみちゃんも」
目を輝かせて、『スターダスト・ドラゴン』に見入る誠司。
「へー・・・」
きっと俺ルールでプレイしているんだろうな、と思いながら、誠司は手紙に目を通した。
そこにはたった一行、
「お前に託す。絶対に渡すな」
と書かれていた。
（誰にだよ。ていうか怖っ・・・）
やっぱり、宛先を間違えているんじゃないだろうか。
「２人とも、ごはんできたよ」
美咲が誠司と歩を呼んだ。
「「はーい」」
１０月８日９時２８分。ひとつの家族の運命が、狂い始めた。

プロローグ（後書き）

ＯＣＧの対戦シーンは３話目から出す予定です。投稿は遅くなるかもしれませんが、頑張って書いていこうと思います。

黒い手紙（前書き）

滝本夫妻のやりとりとかが不自然・・・かも・・・

黒い手紙

９月１４日。
会社でせっせと書類を片付けていた誠司の携帯電話が、突然鳴った。
静かだった職場に鳴り響く着信音。
「はい」
マナーモードにしてなかったことを後悔しながら慌てて出ると、
「誠司！」
美咲だった。
「どうしたんだ？」
チラリと見た隣の席の山田君、彼の視線が痛い。
美咲はひどく取り乱しているようだった。
「歩が、帰ってこないの！」
「遊んでるんじゃないのか？」
「門限はとっくに過ぎてるのよ！？」
誠司は時計を見た。ＰＭ７：００。
「マジか・・・？」
昼飯を食べた後から、時計を全く見ずに仕事をしていた自分を呪った。勝手な居残りだ。残業手当は出ないだろう。
「そ、それで？」
帰る身支度を始める誠司。
「郵便受けに変な手紙が・・・」
「それを先に言ってくれ！」
すぐ帰る、と言って誠司は携帯を切った。
カバンを持って、上司に挨拶をして部屋を出る。急いだのもあって、５分も立たぬうちに会社から飛び出した。
駅に向かい、走る。赤信号がうっとおしい。
「ああ・・・クソっ」

信号機は急いでいる人間の敵である。
（美咲の勘違いであってくれよ・・・）
そう念じながら、誠司は横断歩道を走った。

結果的に言えば、誠司の願いは天には届かなかった。
この後一生分のすべての体力を使うようなつもりで駅から走り、家に駆け込んだ誠司は、
「歩は！？」
扉を蹴破るようにして家に入り、美咲に問い掛けた。
呆然とした顔で、首を横に振る美咲。
時計を見た。７時４７分。
「マジかよ・・・」
歩は真面目な子だ。こんな時間になっても帰ってこないのはおかしい。
そこで、手紙のことを思い出した。
「そういえば、変な手紙って？」
肩で息をしながら、尋ねる。
「コレ・・・」
美咲が、差し出した。この間の手紙とは違う、真っ黒な封筒だ。
もう封は開いている（美咲が読んだのだろう）。中には、これまた真っ黒な手紙が入っていた。
誠司が恐る恐る開くと、文字化けしたような筆記体で文がつづられていた。
「初めまして、滝本夫妻。私達はとある目的のために活動している『組織』です。時間もあまり無いので早速本題に入らせていただきます。この度私達がお預かりしたご子息、返して欲しいと願うのであれば、私達の企画したゲームに参加していただきたい。ただし、その参加条件としてあなた方の・・・」

（なんだこの物騒な雰囲気しかしない手紙は・・・）
「・・・あなた方の所有している『スターダスト・ドラゴン』、このカードを持ってお越しいただきたい。そうしていただけなければ、私達はあなたの参加を認めることが出来ず、ご子息の尊い命を保証することも出来ません。」
「『スターダスト・ドラゴン』って・・・」
たしか、この前来た手紙に入っていたカードだ。
「ゲームは主に、カードゲーム、『デュエルモンスターズ』を用いて行います。私達が用意したプレイヤー9人と、『スターダスト・ドラゴン』を賭けて対戦していただき、見事全勝なされたあかつきにはご子息をお返しし、『スターダスト・ドラゴン』も頂戴しません。尚、警察機構等に話を持ちこまれた場合、ご子息が帰宅することができる日は、永遠に来ませんのであしからず。」
手紙を読み終えた誠司は、崩れるようにイスに座った。
「なんだよそれ・・・・」
言葉が口を突いて出た。
「たかがカード1枚のために、こんなメチャクチャなことするのかよ・・・」
狂っている。この手紙の主は。
「警察は・・・」
「言ったら返さないって書いてるだろう」
「じゃあどうすればいいの？」
「・・・・・・」
何も言えず、黙りこむ誠司。どうすればいいのだろう。頭の中はその疑問でいっぱいいっぱいだった。
と、電話が鳴った。
美咲と誠司の間に、緊張が走る。歩を連れ去った犯人かもしれない、という。
鳴り続ける電話。数秒だけの熟考の末、誠司は腹を括った。
「もしもし」

どんな人間なのか、と恐る恐る受話器を取る。そして、
『よう滝本！久しぶりィ！元気してる？ｗｗ』
と、恐ろしく聞き慣れた声が聞こえてきた。
「音無（おとなし）かよ・・・」
腰が抜けそうになった誠司は、近くにあったイスに、また崩れるようにして座った（背後で、美咲のため息が聞こえた）。
『どうした？子供でもさらわれたような声してｗｗ』
・・・この男、今回の件に絡んでいるのではなかろうか。
「あいにく、テメェみてぇなアホと雑談してるヒマはないんだ。じゃあな」
『あ、ちょ待て切るな俺・・・』
ブツン。
本当に青筋を立てながら、誠司は受話器を叩きつけるように置いた。
「あのアホが」
そう毒ついて電話から離れようとしたそのとき、再び電話が鳴った。
誠司と美咲の間に、再び緊張が走る。
スッ・・・と、今度は早々に受話器を取った。
「もしも・・・」
『ったく、切るんじゃねえよ。せっかく俺がいいこと・・・』
「お前いっぺん水の張られてないプールに飛び込んで来い」
親友に対して殺意が湧いたのは、これが初めてではなかったが、もう今度は相当頭にきていた。
『オザナリだなぁ、まったく』
「じゃあなバイバイ」
『歩のことで電話した』
受話器を戻そうとした手が止まった。
「どういうことだ？」
返答次第によっては絶交してやるつもりで尋ねる。

『俺ん家のポストに、黒い手紙が入ってた。お前のガキをさらったっつー内容だった』
「・・・！？」
『イタズラかと思った。だからさっきはあーゆうノリで電話したんだ。悪かった』
確認するための電話だったのか。
『ハァ？なにふざけたこと言ってんだこのアホがｗｗってノリで返答してくれたらどんなに良かったか・・・』
「ゴメン、俺も言い過ぎた」
『まぁ気にすんなって』
「ていうか、なんでお前のトコに手紙が？」
音無と今回のことは関係ないはずだ。
『主にデュエルモンスターズを使ってゲームを行う。そう指定してきたんだよな？』
「ああ。そうだ」
『じゃあ多分、俺は必要なんだろうぜ』
「え？」
音無が時折意味深な物言いをするのは、昔から同じだった（たいていアホな意味だったが）。
『言ってなかったけど俺、カード販売店舗グループの社長なんだ』
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」
「社長、ＣＥＯ、代表取締役。わかる？」
「ハァ！？」
てっきり無職のパラサイド男だと思っていた。
「嘘・・・だろ？」
『アホ言っても嘘は言わん。俺は社長です』
「マジかよ・・・」
『お前、中２のときくらいに遊戯王やめたんだよな？』
「ああ。確か・・・環境がメチャクチャで、ついていけなくなったんだ」

『黎明期だったからな。仕方無ェよ』
「ていうか、遊戯王なんてまだ続いてんのか？」
『ああ、続いてる。環境も調整されて、ゲームバランスも昔よりマシになった』
「・・・そうなのか」
年月が経つと、色々なものが変わっていくんだな・・・と、誠司は頭のスミで思った。
『ルールも変わったからな。きっと、その辺サポートする人材を用意したかったんだろう』
「ご丁寧に・・・」
『俺とお前の交友関係が割れてるんだ。相手は相当ヤバい連中かもしれねェ』
「ヘタに警察にも掛け合えない、か」
もう誠司と音無の身の回りには監視者がいる、のかもしれない。
『そういうこと』
「どうすりゃいい？」
『指示に従う。それしかないだろ』
「・・・・」
奴らにいいようにされている現状に、誠司は悔しさを憶えた。
しばらくして、黙りこんでいた誠司に、音無は突然切り出した。
『今度、会わないか？』
「え？」
『会って話をする必要があると思う。』
「そ、そうだな」
『遊戯王に復帰するかもだし、いい機会だ。場所を決めよう』
「わかった」
その後、誠司は音無との待ち合わせ場所を決めた。今度の土曜、この近くにあるカードショップに集合するそうだ。
受話器を置いた誠司に、美咲が問い掛けた。
「音無君・・・なんて？」

「どうやら今回のことに巻き込まれてるらしい」
「そんな・・・！」
「それで今度、会うことになった」
腰をおろす誠司。
「歩はどうするの？」
「とりあえず、相手の指示に従おう。警察に行った瞬間、「お前の息子はもう帰らないだろう」なんてことになるのは俺だっていやだよ」
不安げにしている美咲に、誠司は落ち着かせるように言った。
「なんとかするよ。絶対にな」
しかしなんとかできる自信は、正直なところ、誠司には無かった。
心のスミで、溜息をつく。久しぶりの友人との会合が、こんなにも重いものであろうことなど、誰が想像できただろうか。
（最悪だ・・・）

黒い手紙（後書き）

登場人物の名前は、案外適当です

来店（前書き）

投稿が随分遅くなってしまいました・・・反省してます・・・。
一応対戦シーンはありますが、ばっさり行きます。

来店

音無と電話した週の土曜日。誠司は家の近くのカードショップに来ていた。
カードショップ・サイレント。
「「音無し」だけにってか」
中二臭いと思いながらも、店に入る。見渡せば、たくさんのガラスのショーケースに、展示されているこれまた大量のトレーディングカード。
「遊戯王ばかりじゃないんだな・・・お」
近くのショーケースに近寄る。
「なつかしいなぁ、コレ・・・」
『オシリスの天空竜』。アニメの主人公が使っていたカードだ。
友達が持っていたのを、羨んだ記憶がある。
「ていうか、どこで手に入るんだコレ？」
そう呟いた時、
「よう滝本〜」
と、背後から聞き慣れた声がした。
振り向けば、やはり音無だった。
「久しぶりだな、音無」
電話で社長とかのたまっていた割に、音無はいたって普通の格好をしていた。
「社長じゃなくて店長なんじゃないか？とか思っただろ」
「お、思ってない思ってない」
図星だった。
コイツは昔から、やたらと読みがいい傾向がある。
「ま、いいけどさ〜」
ポリポリ、と頭をかく音無。
「あ、ちなみに、その『オシリスの天空竜』はゲーム付属カードで、

公式大会じゃ使用できないやつだ」
「ゲーム付属？」
「遊戯王に限った話じゃないけど、書籍付属、ゲーム付属、雑誌の定期購読特典、応募者全員サービス（有料）なんて、ザラだぜ？」
肩をすくめる。
「へぇ・・・」
そういえば、子供の頃はマンガ雑誌はあまり買わないほうだったし、遊戯王関連のゲームも、買ったことは無かった。
「おかげでこっちは、営業戦略で雑誌とかゲームとか置かなきゃならん」
このままじゃホビーショップになりかねんよ、と冗談めかして音無は店の一角を指した。
ゲームソフト、雑誌などが並んでいるコーナーがある。
「おっと、ここで立ち話もなんだ。こっちに来てくれ」
誠司は音無に連れられ、店の奥に入っていった。

誠司は、音無が受け取ったという手紙を見せてもらった。
「お初にお目にかかります音無様。我々は、ある目的のために行動している『組織』です。」
誠司がもらったものと同じく黒い封筒に入れられ、穏やかな文章で綴られた、物騒な内容の手紙だ。
「なんか読んでると徐々にイライラしてくる手紙だよな」
音無がこぼした。同感だ。
「我々は、滝本誠司様のご子息をお預かりしています。そして滝本様は、ご子息を取り戻すために、我々の行うゲームに参加し、デュエルモンスターズで戦うことになっています。ですが我々は、滝本様はこのカードゲームそのものを、とうの昔にやめている、という訃報を知りました。」

（なにが『訃報』だ）
「そこで、滝本様がデュエルモンスターズに復帰できるよう、サイレントグループの社長、音無様に補佐していただきます。拒否権はございません。尚、各種警察機構にこの話を持ち込まれた場合、このお話はなかったことにさせていただき、歩君も家に帰ることはありません。あしからず」
　手紙を読み終えた誠司は、またふー・・・と息を吐いた。深く呼吸でもしないと、怒りで頭がおかしくなりそうだからだ。
「メチャクチャだろ？」
「ああ」
　ぎゅうっ・・・と誠司が拳を握りこんだ。
「・・・っ」
「こいつらの指示に従うのなら、俺はお前に協力する」
「？」
「こいつらは、条件さえ飲めば歩君を帰すと言っている。なら、俺は従うべきだと考える」
　もっともだ。だが
「そんなこと、信用できないだろ」
「だが、警察に行っても、そこで終わりだ」
「っ・・・・そうだな」
「ま、そういうわけだから」
　音無はガシッ、と誠司の腕を掴んだ。
「なちょっ！？」
「こっち来な」
　言い返すヒマもなくずるずると引きずられて、誠司は店先にやってきた。
「な、なんだよ？」
「仕事の時間だ！来いお前ら！」
　音無がパンパン、と手を叩くと、レジ裏にいた男女が出てきた。
「ど～かしましたぁ？」

ゆるゆるとした感じで、この手の店の店員にあるはずの意欲が感じられない。がしかし
「ルール解説係の、佐藤と日暮(ひぐらし)だ」
音無がルール解説係、と言った瞬間、
「どーも、佐藤マコトです！」
「日暮(さんし)三枝です！」
と、先ほどとは打って変わり、店員スマイル全開で、ポーズまでキメて実にハイテンションに挨拶してくれた。
さきほどとは全く様子が違う、あまりの豹変ぶりに、誠司は少し引いた。
「キャラ作ってるのか？」
「「給料はずんでくれるもんで！」」
2人は店員スマイルを保ったまま言った。
「サイレントの店舗1軒1軒には、こういうキャラのルール解説係がいるんだ」
「サイレントじゃないよね。音無しどころかやかましいレベルだよね」
「あ～お前ら。コイツ、いい歳こいて遊戯王に復帰したいらしいから、ルールの説明してあげて」
音無は誠司を指して言った。
「は？」
それは違う、と言いたい誠司を無視して、店員2人は向かい合うように近くのテーブルに座った。
店員スマイルは貼りついたままだ。
「ではでは、デモデュエルを行います！」
「なお、ルール解説のため、カードの順番は仕組んであります！」
「そ、そうですか・・・」
教える相手であるはずの誠司を置き去りにして、ルール解説係はガンガン進めていく。
「「デュエルスタート！」」

マコトＬＰ８０００
三枝ＬＰ８０００

「まず互いに持ち点８０００ずつからスタートします」
「これを奪いきったら勝ちだぞ～」
「他にも勝利条件は多々ありますが、ここでは割愛」
「細かいことは、また後で」
阿吽の呼吸で、解説を進めていく2人。
「デュエル開始時、お互いにデッキの上からカードを5枚引いておきます。この手札を使って、デュエルを進行していくのです！」
「まずは僕の先攻、ドロー！」
山札から勢い良くカードを引く三枝。
「ターンの開始時、ターンプレイヤーはデッキからカードを1枚『ドロー』します」
「ドローフェイズ終わり！スタンバイフェイズを経過して、メインフェイズに入ります」

店員たちの様子を見ながら、誠司は音無に言った。
「俺、復帰したいわけじゃないし、フェイズの進行なら知ってるぞ」
だが、音無はボソリと、
「本当の理由を言うわけにもいかんし、それに、こういうシナリオなんだ。見守ってやってくれ」
と、言い、腕組みした。

三枝が手札から、緑の枠色のカードをぺち、と出した。
「では僕は、魔法カード造園・・・じゃね、『増援』を発動します」

「そんな字幕無きゃわからんようなネタ入れなくていいだろ」
「まあ、文章だからな」

「魔法カードは、自分のメインフェイズに使える、便利なカードです！1ターンに1度まで、とかそんな制限ありませ～ん！」
「効果により、デッキから☆が4以下の戦士族モンスターを手札にくわえます。本当ならこの後、デッキはシャッフルしなきゃならないけど、解説の都合上、割愛！」

「だから知ってるんだけどな・・・。てかさっきからそうだけど、割愛していいのか？」
「解説だからな」

「魔法カードは、使った後墓地に行くよ～」
「そして、今手札に加えた『切り込み隊長』を召喚！」
手札から枠色がオレンジ（？）のカードを縦向きに出す三枝。

切り込み隊長
☆3　ＡＴＫ（攻撃力）　１２００

「切り込み隊長の召喚時、手札から☆4以下のモンスターを特殊召喚できます！『チューン・ウォリアー』を特殊召喚！」
薄い枠色のモンスターが置かれた。

「お前がフェイズの流れはわかってるとかごちゃごちゃ言うから、こいつら「召喚」とか「モンスターカードゾーン」とか「魔法・罠ゾーン」とか他にも色々ハショり始めたぞ」
「俺のせい！？」

チューン・ウォリアー
☆3　チューナー　ＡＴＫ　１６００

「チューナーって？」
そう誠司が質問した瞬間、キラーン！！と2人の目が光った。
本当に光った。
「いまから説明しまさぁ！」
「☆3『切り込み隊長』に、同じく☆3『チューン・ウォリアー』をチューニングし、エクストラデッキから、☆6『大地の騎士ガイアナイト』をシンクロ召喚します！」

大地の騎士ガイアナイト
☆6　シンクロ　ＡＴＫ　２６００

場に出されるモンスター。それに誠司は見覚えがあった。
（白枠のカード！）
『スターダスト・ドラゴン』と同じだ。
しかも、このカードは融合デッキから出てきた。
「シンクロ召喚は、チューナー1体と非チューナー1体以上を墓地に送り、そのレベル合計が等しいシンクロモンスター1体を、エクストラデッキから特殊召喚する行為です」
「チェーンに乗らず、またシンクロ素材となったモンスターはリリースされたとしては扱いません」
楽しそうに説明する2人だったが、誠司は思いっきり置き去りにされていた。
「エクストラデッキ・・・？リリース・・・？」
聞き覚えの無い単語が頭の中で反響しあっている。
「あ～。融合デッキはエクストラデッキ、生贄はリリース、生贄召喚はアドバンス召喚、と、マスタールールから一部の用語が変わったんですよ」
マコトと三枝のにこやかさが、誠司には少し痛かった。
「シンクロ召喚のシステムが導入されたのも、マスタールールからです」

「あ、じゃあ、マスタールールから変化した事柄についての解説をしていきますね！」
融通の利く店員だ・・・。
普段はやはり初心者指南がメインなのか、よく見れば彼らの手札には儀式魔法や『融合』もある。誠司はなおのこと申し訳なくなってきた。
「では、先攻は攻撃できないので、カードを1枚伏せ、ターン終了！」

三枝　手札3

「ではでは、私のターン！」
シュッ・・・とカードをドローするマコト。
「メインフェイズに入り、手札から『二重召喚』を発動！このターン、あたしは通常召喚が2回できます！そして、手札から『グリーン・ガジェット』を召喚！」
「あ」
これも見覚えがあるカードだ。主人公（表）が使っていたカードだった気がする。
「グリーン・ガジェットの召喚時、デッキから『レッド・ガジェット』を手札に加えます」
1：1交換で、損失なし。
「そして、『レッド・ガジェット』を召喚して、効果発動！」
たしか、グリーン・ガジェットと似たような効果だった気がする。
「デッキから、『イエロー・ガジェット』をサーチ！」
誠司は場を見て少し驚いた。
事実上、手札1枚の損失で2体のモンスターが場に並んでいるのだ。相変わらずガジェットは恐ろしい。
「で、☆4のモンスター2体を重ねて、『ジェムナイト・パール』をエクシーズ召喚しま～す！」

ジェムナイト・パール
★４　エクシーズ　ＡＴＫ　２６００

（また新しい単語が出てきた・・・）
黒いカードを注視する誠司。
「あ、ちなみに、同じレベルのモンスター複数体を重ねて、エクシーズモンスターを特殊召喚する行為を、エクシーズ召喚と言います」
「重ねられたモンスターは、場に存在しているとは扱われません。なんと言いますか・・・エクシーズモンスターの中に、エクシーズ素材として内包されてるような感じです」
（わからねぇ！）
「エクシーズモンスターには、エクシーズ素材を取り除くことで効果を発動するやつがいますが、残念ながら、あたしのジェムナイト・パールは効果持ちではありません」
「あと、エクシーズモンスターの★は、レベルではなく、ランクというものになっています。実際、黒いし、表示もレベルとは逆向きでしょう？」
「エクシーズモンスターも、シンクロモンスターと同じでエクストラデッキにいるモンスターです」
「おっとそういえば。ちなみに融合デッキは枚数に制限がありませんでしたが、エクストラデッキは、シンクロ、融合、エクシーズ、それらを合わせて１５枚までしか入れられません」
「昔と違って、入れ放題ってワケにはいかないんだな」
「シンクロもエクシーズも出しやすいですからね～」
「あ、でも融合モンスターも近年は出しやすくなっているんですよ～」
「ありがたいことですね～」
「・・・・」
憶えることの多さを想像して、誠司は頭が痛くなってきた。

そして1時間後。
説明デュエルを終え、誠司に現在の環境のおおまかな説明をしたルール解説の2人は、もとどおりの気だるげな顔に戻ってレジ裏に引っ込み、誠司はテーブルに突っ伏していた。
「で、理解できたか？」
むかいのイスに座る音無。
「にわかだったからな。ルール自体がこんなに細かいもんだとは思わなかった」
重々しく顔を上げ、誠司は返答した。
そういえば、昼を過ぎているのに客が全くいない。どういうことだろうか。
「今日、この店には緊急で臨時休業にしてもらった。ここの店長は、レジ裏であの2人と昼寝でもしてるんじゃねえかな」
「やっぱ社長なんだな」
実は、誠司はつい先ほど、「サイレント」について調べてみたのだ。するとなんたることか、「カードショップ・サイレント」は沖縄にまで5軒も店舗があるほど全国展開しているグループだった。
「人間、どう出世するかなんてわからないもんだな・・・」
「ん。なんか言ったか？」
「何も」
飄々とした態度が少し忌々しい。
「で、どうするんだ？」
「何を？」
「デッキだよデッキ」
「あ。」
忘れていた。デッキが無ければ、やつらの言う「ゲーム」に応じることが出来ない。

「一応、カードはある」
木曜に、実家に帰って押入れにもぐった。そこで見つけたホコリだらけのダンボールが、車の中にある。
「まさにパンドラのハコだな」
嬉々とした体で、音無はにいっと笑った。
「どこがだ」
俺の事情を忘れてるんじゃないか？と、誠司はひそかに訝しみ始めた。

来店（後書き）

ちなみに、三枝とマコト、どちらが勝ったのかは決めてません。
あのローペースでＬＰ８０００削るということを考えると、ちょっとめまいｇ（ｒｙ
投稿のペースは上げたいと思いますが、なかなかはかどりません。
ついつい別の方向にそれたりなんかしちゃって・・・・
しかし、挫折はしない（挫折も何もまだ３話目だけど）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6719w/

家族奪還ゲーム

2011年10月12日10時54分発行